

Title	シュンペーターにおける科学とイデオロギー
Sub Title	Science and ideology in Schumpeter
Author	塩野谷, 祐一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1984
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.76, No.6 (1984. 2) ,p.764(32)- 793(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19840201-0032
Abstract	
Notes	小特集：ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター：生誕100年
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19840201-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュンペーターにおける科学とイデオロギー*

塩野谷 祐一

目 次

1. はしがき
2. 科学哲学と科学社会学
 - (1) 科学・ヴィジョン・イデオロギー
 - (2) 発見の文脈と正当化の文脈
 - (3) ラカトスとの比較
3. 静態・動態二元論の批判
 - (1) 定常状態・成長過程・経済発展
 - (2) マグナ・カルタとしての均衡理論
 - (3) イデオロギーとしてのワルラス
 - (4) 防備帯としての革新理論
4. 経済発展と社会的文化発展
 - (1) 経済発展理論の限界
 - (2) イデオロギーとしてのマルクス
 - (3) ワルラスとマルクスとの両立
5. シュンペーターにおけるイデオロギーの性質
 - (1) 観念論的性質
 - (2) 反政策論的性質

1. はしがき

シュンペーターの社会科学的研究のプログラムは、単に資本主義の経済発展を解明することではなく、経済発展をその一部に含む資本主義社会の総体としての発展——彼はそれを「社会的文化発展」と呼ぶ——を解明することであった。われわれは別の機会に、彼が構想した問題領域と研究方法の全貌を展望し、このことを明らかにした⁽¹⁾。彼が視野に取り入れた問題は、(1)与えられた与件のもとに成立する経済静態のメカニズム、(2)与件を内生的に変革する経済動態のメカニズム、(3)経済を含むすべての社会生活の領域の相互連関のメカニズム、の3つであった。そして彼は経済分析の方

* この論文は昭和58年10月、理論・計量経済学会（上智大学）において報告された。予定討論者の置塩信雄、伊達邦春、福岡正夫の諸教授に感謝する。

注（1） 塩野谷祐一「シュンペーターの問題と方法——方法序説」一橋大学研究年報『経済学研究』25, 昭和59年。

法として、(1)歴史、(2)統計、(3)理論、(4)経済社会学、の4つを挙げ、歴史および経済社会学への関心によって、経済を超える領域への接近を意図したのである。

このようなものが、シュンペーター自身が実践した社会科学の総体であるとするならば、彼が描いた資本主義社会の発展の全体像はどのように構築されているのであろうか。シュンペーターにおける著しく特徴的なものは、この全体像を構成する部分部分の科学的分析にあるよりも、部分部分に位置を与え、全体を構成するさいのデザイン、構想、問題意識といったものにあると思われる。彼は経験的知覚を超えた理性的認識の対象として、資本主義社会の根底に内在する「普遍的な真理」を求めようとした。それは彼自身の言葉でいえば、「事物の論理」(Logik der Dinge)⁽²⁾であって、このようなものが存在するという想定が研究者の側に思考の一貫性と統一性を要求するのである。彼のいう「事物の論理」の重要性を強調するために、それをプラトンの「イデア」に近似した概念としてとらえることができるかもしれない。

シュンペーターにおける総体的な構想力の性質を理解することなしには、彼の個々の業績の意義を十分に評価することはできないし、それらを体系をなすものとして理解することはできない。彼は対象とする個々の問題領域においてユニークな業績を挙げたが、たとえば、彼が主張した利子動態説とか、動態的独占論とか、経済発展における革新の強調とか、古典的民主主義理論の批判とか、資本主義の自己崩壊説とかいったものに個々に注目するだけでは、彼はただ変った説を述べた学者として、個々の問題を論ずる論文の脚注に記されるにとどまるであろう。

シュンペーターは社会発展の全体像を一貫した「事物の論理」ないしは「イデア」によって描き出すために、特有のデザイン、構想、洞察、問題意識を抱いた。われわれはこれをシュンペーターの「イデオロギー」と呼びたいと思う。この言葉は、彼自身が科学的認識に先行するヴィジョン形成の段階に介入する不可欠かつ不可避の要素として論じたものである。彼は科学とイデオロギーとのからみ合いを問題としながらも、一定の条件さえ有効にととのうならば、結局においてイデオロギー的要素は科学から排除されうると考えた。これが適切な見方であるかどうかは、方法論および学説史の研究にそくして評価されなければならない問題であるが、主観的な気持の上では、シュンペーターは経済学における価値判断や政策論に対して強い嫌悪と反発を示し、純粋な分析装置としての経済学の進歩を語ろうとした。そのため人々がシュンペーターを論ずるさい、彼のイデオロギーを問題にすることはほとんどなかったように思われる。

その代りに、人々はシュンペーターのヴィジョンについては過剰なほどに、しかも濫用といえるほどに論じている。「ヴィジョン」という言葉は、やはりシュンペーターが「イデオロギー」と並んで用いたものであるが、人々は「イデオロギー」よりも価値的内容を著しく含まない「ヴィジ

注(2) J. A. Schumpeter, *Vergangenheit und Zukunft der Sozialwissenschaften*, Duncker & Humblot, München und Leipzig, 1915, p. 102. (谷嶋喬四郎訳『社会科学の未来像』講談社, 昭和55年, 142ページ。)

(3) Schumpeter, "Science and Ideology," *American Economic Review*, March 1949.

ン」という言葉の方を好んでいるように見える。しかし、人々の「ヴィジョン」の概念の使い方は著しく曖昧であって、それは単に発想とか考え方というにすぎないものを指すか、彼が理論とみなしている経済社会学的考察そのものを指していることが多い。しかも、人々がシュンペーターの「ヴィジョン」を語るさい、十中八九、資本主義経済における企業者の革新を念頭においている。このような「ヴィジョン」の理解の仕方は、シュンペーターが科学とヴィジョンとを区別して用いたさいの方法的な意味にそぐわないし、また彼の理論体系を貫く構想力の具体的性質を表わすのに十分ではないように思われる。

そこでわれわれはまず、科学とヴィジョンという概念を科学哲学の枠組みの中でいっそう明確にした上で、シュンペーターの理論体系を貫く構想力としてのイデオロギーを問題にし、それが何であるかを特定化したいと思う。そしてそれが通俗的な革新の観念ではないことを論じたい。同時に、彼自身がいうように、彼の理論体系からイデオロギー的要素を取り除くと、科学的分析の装置として、何が残るかを考えてみたい。

2. 科学哲学と科学社会学

(1) 科学・ヴィジョン・イデオロギー

シュンペーターは、科学的行為がヴィジョンの形成と科学的モデルの構成との2つの段階から成るとみなしている。第1の段階は、われわれが分析しようとする一連の現象を研究対象として認識することであって、そのためには何が重要であって何が重要でないかについての判断が必要である。このような前科学的行為としての判断がヴィジョンである。第2の段階は、ヴィジョンによって与えられた素材を科学的に分析することであって、ここでは事実の蒐集と概念および分析装置の構築とが相互にフィードバックを通じて行われ、具体的な仮説や命題が引き出される。

これらの2つの段階は、ちょうど三段論法が大前提、小前提、結論という3つの段階から成ると同じような技術的性質のものである。それに対して、イデオロギーはヴィジョン形成の段階に入り込む特定の要素を指すのである。すなわち、イデオロギーとは、問題対象である経済過程について、われわれの意識の中に存在する先入観である。この先入観は価値判断や政策的要求のように意識的に統御できるものとは異なる。もちろん、実際には両者は結びついていることが多いけれども、シュンペーターのいうイデオロギーは、彼自身が注意しているように、通常その言葉が担っている価値判断や政策的要求とは切り離して理解されなければならない。

シュンペーターは一方において、イデオロギーの概念についてのマルクスの意味合いを排除する。第1に、マルクスはブルジョワジーの理論体系がイデオロギー的基盤をもつことを攻撃したが、自分の体系に含まれているイデオロギー的要素には盲目であった。第2に、マルクスはイデオロギ

一が階級的利害を反映しているとみるが、そのように狭くみるべきではない。第3に、マルクスはイデオロギー的影響を受けている思想はそれだけで非難されるべきであるとみなしているが、イデオロギーは必ずしも虚偽ではない。以上がマルクスのイデオロギー論についてのシュンペーターの論点である。また他方において、シュンペーターはマンハイムがいうように、イデオロギー的妄想にとらわれない不偏不党の知性人がいるという考え方も排除した。

たしかに、シュンペーターにはヴィジョンとイデオロギーとを相互に置換可能なもののように考えているところもあるが、彼の場合において両者は別個の概念である。ヴィジョンは理論化されるべき問題像の大ざっぱなイメージであって、結局は科学的モデル構成の段階において一定の方法的手続に従って明確化される。理論化されない部分のヴィジョンは科学にとっては単に余計なものであり、いってみれば加工されなかった材料の残りにすぎない。したがって、ヴィジョンと科学的モデルとを並べることには大して意味がないのである。むしろ重要なことは、ヴィジョン形成の段階において観察者が社会的環境によって影響され、問題像を形成するさいに先入観としてのイデオロギーが作用することである。したがって、彼の「科学とイデオロギー」という論文名が示すように、科学的モデルとイデオロギーとを対置することにはより大きな意味がある。イデオロギーは問題像（ヴィジョン）をどのようにとらえるかという過程を支配するものであって、問題像そのものではない。問題像はやがて具体的に理論モデルに構築されるべきものであって、そうならない問題像は単なる幻想にすぎない。

しかし、重要なことは、理論化されなかった部分のヴィジョンあるいは理論モデルに具体化されなかった問題像がそれ自身の生命をもち、それ自身の機能を演ずるということである。そのようなヴィジョンは単なる幻想として消滅してしまうこともあるが、しかし政治的価値判断や社会的信条と化することもあり、科学的議論を受けつけない形で影響力を発揮するからである。しかもそれが科学であるかのように、科学の中に偽装されて存続するのである。シュンペーターはこれを「イデオロギーの分析に対する勝利」とか「ヴィジョンによる分析の無効化⁽⁴⁾」と呼んでいる。

シュンペーターは科学的分析としての経済学の歴史を考えるさい、政策論や経済思想の側面を捨象するという態度をとっている。それにもかかわらず、彼が人一倍イデオロギーの問題に関心を寄せていたことは彼の科学観を知る上できわめて重要な点である。科学的認識と政策的主張とはそれほど単純に分離できるものではない。両者は加工や洗練の程度を異にするとはいえ、イデオロギーおよびヴィジョンという共通の素材から生れたものである。いってみれば、科学、価値判断、ヴィジョン、イデオロギーはすべて同じ鍋の中の材料であって、それらは無視できない相互関係の中にある。科学だけを考えるに当たっても、他の要素を無視することのできない本質的な理由があるというのが、シュンペーターの考えであろう。それではその理由は何か。科学とイデオロギーとの関係

注(4) *Ibid.*, p. 355.

は、彼が設定する社会科学の性質を重ねて明らかにしてくれるであろう。ここでは学説史に関する個別的な詳細に立ち入ることなく、一般的な形で3つの論点を提起したい。第1は相対主義、第2は経済発展分析、第3は科学史におけるフィリエーションである。

第1。普通、科学哲学は科学の構造や手続を論ずるさい、出来上った理想的な理論のあり方のみを問題にしている。それに対して、シュンペーターはマルクスのイデオロギー論やマンハイムの知識社会学の系譜を念頭において、理論の形成に先行するヴィジョン形成の段階をも科学的行為の一部とみる。これは科学哲学に対して科学社会学を持ち込むことを意味し、理論が社会的に条件づけられているという相対主義を強調するものである。もちろん、相対主義の考え方は新しいものではない。重要なことは、彼の場合にそれによって何がもたらされるかである。

「ほぼ19世紀の半ばごろまで、『科学』の発展は純粹に知的な過程とみなされていた。すなわち、経験的に与えられた宇宙の探究の連鎖として、あるいはいうまでもなく多様な仕方で社会の歴史に影響を及ぼしたり、それから影響を受けたりしながらも、自己の法則に従って進行する発見や分析的思想のフィリエーションの過程とみなされていた。『科学』と社会の歴史の他の部門との間のこのような相互関係を、『科学』が社会構造の客観的与件、とくに科学研究者の社会的位置に依存するという関係に転化させたのは、マルクスが最初である。この科学研究者の社会的位置は、彼の現実に対する見方、したがって現実の中の何を見、現実をいかに見るかを決定するのである。この種の相対主義は、もしその論理的帰結を厳密に追求するならば、新しい科学哲学と新しい科学的真理の定義を生むことになる。⁽⁵⁾」

自然科学の場合には、社会的文脈に関する相対主義は問題の選択や接近方法の選択以上には及ばないが、社会科学の場合には、相対主義は、特定の命題の存在そのものが見る人に依存しており、誰にとっても妥当する普遍的な経験に基づいてはいないということである。したがって、シュンペーターの相対主義の強調は、社会科学が十分に客観的な性格を勝ち得ていないことを意味した。

残念ながら、彼は相対主義を積極的な基礎として、「新しい科学哲学」と「新しい科学的真理の定義」にまで進むことをしなかった。彼は相対主義を認めざるをえないけれども、誰にも同じように見える多くの現象が存在すること、および科学における方法的手続がイデオロギーの介入を臆断することを頼りとしたのである。しかし、彼は中立的科学の可能性について楽観はしていなかったのであって、そのために科学においてイデオロギーが不可欠であると同時に危険なものであるということに注意を喚起したのである。⁽⁶⁾

第2。ヴィジョンと呼ばれる経済過程の問題像が重要な役割を演ずるのは長期的変化の過程についてである、というシュンペーターの考え方は注目に値する。「われわれの関心が経済諸量の『相

注(5) *Ibid.*, p. 348.

(6) Schumpeter, *History of Economic Analysis*, Oxford University Press, New York, 1954, p. 43. (東畑精一訳『経済分析の歴史』1, 岩波書店, 昭和30年, 83ページ。)

互依存』の仕方——純粋論理の平面において——定式化しようとする以上に野心的なものでない場合には、すなわちわれわれの関心が静態的均衡の論理ないしは定常的過程の本質的特徴にある場合には、ヴィジョンの役割はささやかなものにすぎない。なぜなら、この場合には、われわれは簡単に認識することのできる少数のかなり明白な事実を研究しているからである。ところが、長期的変化の過程にある経済生活を分析する課題に転ずる場合には、事態は一変する。この場合には、この過程の真に重要な要因や特徴を洞察することの方が、それを把握した上で（あるいは把握したと考えた上で）その作用様式を定式化することよりもはるかに困難である。したがって、ヴィジョン（およびそれに付随するあらゆる誤謬）はこの種の試みにおいては、他の場合におけるよりもいっそう大きな役割を演ずるのである。⁽⁷⁾」

たしかに長期の発展過程においてはさまざまなものが変化する。それらの間にどのような因果関連を設定し、それを通じてどのような趨勢的シナリオを描くかについては、いろいろな可能性がある。また長期の発展の理論が検証されたり反証されたりするには、長期的な経験が必要である。それがなされない限り、長期理論は事実上問題像の提示にとどまるのである。シュンペーターが取り組んだ「普遍的社会科学」の課題は、まさにこのような長期の過程であって、彼はそこではイデオロギーやヴィジョンが十分にチェックされないままに存続することを認めたのである。

第3。シュンペーターはヴィジョン形成の段階に現われるイデオロギーの源泉を次のように特定している。科学者はまったく無から、あるいは科学者の心理的ひらめきのみから出発するのではなく、「われわれはわれわれの先駆者ないし同時代の人々の研究か、そうでなければわれわれの囲りで世間一般に行われている観点から出発する。⁽⁸⁾」これらのものは研究者にとっての社会的環境に属するものであって、この意味で、「もととなるヴィジョンはその性質上イデオロギーである」⁽⁹⁾（傍点シュンペーター）。また彼が別のところで書いている表現によれば、「分析の仕事は事物に関するわれわれのヴィジョンによって提供される素材をもって始まるが、このヴィジョンはほとんど定義上イデオロギーである。⁽¹⁰⁾」つまり社会についての問題像は先入観から始まるというのである。

このように先行者の理論やヴィジョンは、のちの人々のイデオロギーとなることを通じて再び理論化の機会を与えられ、これによって理論の歴史的継承すなわちフィリエーションが生み出されていく。シュンペーターの経済学史研究は表面的にみると、分析的体系の内面的発展のみを追求しているように見えるが、実は逆説的ではあるが、彼はそれを行うために、科学にとって外面的な契機である知識社会学を媒介としたのである。

科学とイデオロギーに関するシュンペーターの問題提起の意義は、その後の科学哲学の展開の中

注(7) *Ibid.*, p. 570. (邦訳3, 1198ページ。)

(8) Schumpeter, "Science and Ideology," p. 350.

(9) *Ibid.*, p. 351.

(10) Schumpeter, *History*, p. 42. (邦訳1, 82ページ。)

で評価するのが適切であろう。

(2) 発見の文脈と正当化の文脈

現代の科学哲学は理論ないし仮説の発見(discovery)の文脈と正当化(justification)の文脈とを区別する。この2つの文脈はシュンペーターの上述の2つの段階に相当する。理論を発見ないし着想することがヴィジョンの段階であり、理論を正当化ないし検証することがモデルの段階である。論理実証主義ないしその修正としての論理経験主義の立場においては、理論を着想する段階についてはいかなる論理的方法も存在するものではなく、科学哲学は出来上がった理論を評価する段階のみかかわると考えられた。

発見の文脈と正当化の文脈とは次のように対比される。⁽¹¹⁾ 発見は理論や仮説の着想、発生、起源にかかわり、正当化は理論や仮説の評価、検証、確証にかかわる。発見は心理学、社会学、科学史の対象であり、正当化は科学哲学の対象である。発見は主観的であるが、正当化は客観的であると同時に、理論の評価や選択を扱うという意味で規範的である。発見は研究のための事実の選択を行い、正当化はこの事実が仮説のための客観的証拠となるか否かを評価する。

論理実証主義の科学哲学は理論の正当化の文脈にのみ関心をもち、理論の発生をめぐる諸要因を無視した。これは理想的に作り上げられた理論の静態的な構造を問題にしていたからである。しかし、論理実証主義に対するその後の批判はこの側面にも及んだ。論理実証主義によれば、理論における非分析的言明は観察を通ずる経験的解釈によって初めて認知的の有意性をもつことができ、経験的証拠によってテストされる。しかし、理論と観察とを厳密に区別することはできず、観察は理論的フレームワークを前提とすることによって可能となる。また確証や反証のテストは簡単な一回限りの最終的評価を意味するのではなく、理論は異なったさまざまな基準によって受け入れられ、粘着性をもって存続すると同時に、限りなく修正と発展を続けていくものである。このような批判によって、理論の生成を扱う発見の文脈は科学哲学の不可欠な対象となった。⁽¹²⁾ このことによってもたらされた最も重要な帰結は、科学の成長、存続、変化という動態的過程の重視である。論理実証主義以後のポパー、クーン、ラカトス、ファイヤアーベントなどの業績はこの流れを形成した。

発見の文脈について社会学的考察をすることを超えて、科学哲学としての発見の論理を想定することができるだろうか。いいかえれば、科学方法論は理論の評価や選択について、単に社会学的記述をなしうるにとどまらず、客観的規範を提供しうるものであろうか。この問題についての結論はまだでていない。さまざまな接近方法が生み出され、方法論的多元主義を認めざるをえないのが現

注(11) C. R. Kordig, "Discovery and Justification," *Philosophy of Science*, March 1978, pp. 110-1.

(12) F. Suppe, "The Search for Philosophic Understanding of Scientific Theories," in F. Suppe (ed.), *The Structure of Scientific Theories*, 2nd ed., University of Illinois Press, Urbana, 1979, pp. 125-6.

(13) 状だからである。しかし新しい流れに見出される重要な特徴は、科学哲学の論理は従来考えられていたよりもずっと複雑なものであって、それを吟味するに当って科学社会学や科学史の視点が強調されるようになったことである。

このような事情に照らしてみると、シュンペーターの科学とイデオロギーに関する議論は、その後の科学哲学の発展に先鞭をつけたものといえる。彼はみずから学説史研究に強い関心を持ち、理論の発見の文脈すなわちヴィジョンの段階にイデオロギーという概念的枠組みを導入し、それを媒介として理論の正当化の文脈を科学の歴史的成長という観点から見ようとしたのである。この方法は、発見の文脈を無視するという論理実証主義の立場を超えていると同時に、発見の文脈を単に知識社会学の問題として見るという旧来の立場を超えている。彼が客観的・中立的科学としての経済学に関心を限定しながら、イデオロギー（および学派）に関する社会学的側面に言及しているのは決して不可解な矛盾ではない。それは1950年代以後科学哲学が向かわざるをえなかった新しい方向を示すものであった。いっそう具体的にいえば、シュンペーターの観点はラカトスの方法論に照らして理解することが最も適切であるように思われる。

(3) ラカトスとの比較

(14) ラカトスは、ターンのパラダイムに相当するものを「科学的研究計画」(SRP; scientific research programme)と名づけ、1つのSRPは消極的発見法(negative heuristic)と積極的発見法(positive heuristic)とをもち、前者は堅固な中核(hard core)の保持にかかわり、後者は防備帯(protective belt)の展開にかかわるとみなした。科学的研究計画の「中核」はきわめて一般的な理論仮説であり、消極的発見法はこの「中核」がさまざまな批判や変則の提起にさらされることを禁ずる役割をもつ。観察と理論との間のギャップから生ずる批判や変則の処理を引き受け、現実の説明と予測に関して理論的仮説の適用範囲を拡大していくのは「防備帯」である。「防備帯」は一般的理論仮説を補足し具体化するための補助仮説、観察仮説、初期条件、数学的・実験的技術などから成る。積極的発見法はこのような具体的な理論展開の方法をいう。

1つのSRPは単一の理論を指すのではなく、「中核」を土台として展開される一連の「防備帯」の系列を指す。一般的な理論仮説としての「中核」は反駁の対象となるものではなく、現実を説明し予測しようとする「防備帯」のみが反駁可能なものである。「防備帯」として形成される一連の理論の各々がこれまで予想されなかった新しい事実を予測し(すなわち経験的内容を高め)、かつ新しい事実の発見を導く(すなわちその経験的内容が確認される)ならば、そのSRPは前進的(progressive)

注(13) B. Caldwell, *Beyond Positivism: Economic Methodology in the Twentieth Century*, George Allen & Unwin, London, 1982.

(14) I. Lakatos, "Falsification and the Methodology of Scientific Research Programmes," I. Lakatos and A. Musgrave (eds.), *Criticism and the Growth of Knowledge*, Cambridge University Press, London, 1970.

であるといわれる。SRPが前進的であるかどうかということが、異なったSRPの間の優劣をきめる基準である。

「防備帯」という言葉が端的に示すように、1つのSRPないしパラダイムにおける「中核」としての一般的理論仮説を現実の挑戦から守るのは、「防備帯」としての具体的理論仮説である。1つの「中核」に確信を抱く人々はそのSRPにとどまることができる。「中核」を変えようとする人はそのSRPを離れ、別個のSRPに参加しなければならない。SRPが前進的であるかどうかの判断には時間要素が関係しており、優劣の判定には長い時間がかかる。したがって、ラカトスはその判定は「後知恵」に待つしかないとみなすのである。そのために競合的なSRPの存在が普通のこととみなされる。

このようにしてラカトスは、ポパーのいうように科学がたえざる反証によって変革を繰り返していくというのではなく、1つの「中核」を共有する一連の同質的な理論群が著しい粘着性をもって存続する姿を描いた。同時に、ラカトスは、クーンのいうように科学史を支配的パラダイムの交替とみるのではなく、SRPの競合する状態を正常と認めた。かくしてラカトスは一方において、反証の方法論によって正当化の文脈にかかわったポパーと、他方において、パラダイムの議論によって発見の文脈にかかわったクーンとを架橋することができたのである。

以上の説明から示唆されるように、われわれはシュンペーターのイデオロギーと理論モデルとの区別は、「中核」と「防備帯」との区別に対応すると考えることができる。このように考えるならば、シュンペーターのいうイデオロギーが単に理論モデルの構成に先行し、モデルが構成されれば無視してよいアドホックな要因ではないことが確認されるのである。イデオロギーは挑戦されることのない「中核」として「科学的研究計画」の根底に位置し、一連の理論的仮説を自己の囲りに集め、1つの学問体系にまとまりを与えるのである。われわれはこのラカトスの概念によってシュンペーター自身の理論構造を解釈したいと思う。

3. 静態・動態二元論の批判

(1) 定常状態・成長過程・経済発展

シュンペーターの経済静態のモデルは、新古典派経済学の一変種である。彼の基本的な経済静態のモデルは、一定の与件のもとで成立する均衡状態にかかわるが、時間を考慮に入れれば、年々同一の規模と同一のパターンをもって繰り返される定常状態あるいは循環の流れ(circular flow)の過程にかかわるものである。この定常過程は、外生的要因とみなされる自然的・社会的・制度的条件を一定とするばかりか、経済体系にとって内生的な変化要因とみなされる嗜好、技術、および生産要素の量と質を一定として成立する。このモデルの特徴は、貯蓄・投資が存在せず、利子率がゼ

ロと想定されていることである。均衡における正の貯蓄・投資は生産要素としての資本ストックの拡大を意味するからである。

シュンペーターの経済静態は定常過程を含むばかりでなく、人口および資本の増大する成長過程をも含んでいる。この過程では、たしかに経済の規模は拡大しているけれども、それは既存のものの単なる量的拡大にすぎず、「新しいことをすること」、「違った仕方をする」とは区別される。一定の生産関数のもとでの生産要素の増大はもちろん経済体系に影響を及ぼすけれども、大した攪乱なしに容易に吸収されるとみるのである。

こうして彼は経済動態を特徴づけるぎりぎりの要因だけを残して、他を経済静態の世界に含める。この意味で、シュンペーターの方法は経済動態現象の純粹化である。純粹な経済動態の世界は彼が「経済発展」と呼ぶ現象の世界であって、それは技術的生産関数の変化にとどまらず、広義の商品供給方法の変化によって引き起こされる。この変化を彼は「革新」という言葉によって総括するが、「革新」は新しい商品、新しい生産方法、新しい販路、新しい供給源、新しい組織を含んでいる。このような革新が経済静態のモデルに対してもつ意義は、それが経済体系の内部から与件を変革し、独特の攪乱（景気循環）を引き起こすということにある。与件としての嗜好の主要な変化も生産側の革新の結果にはかならない。「革新」によって引き起こされる経済体系の変化や反応の一切を「経済発展」と呼ぶのである。

このように、定常過程や成長過程は資本主義経済発展の姿をきわ立たせる役割をしているが、ここで2つの点に注意したい。第1に、シュンペーターは経済発展から区別される経済過程として、単に静態的な定常状態だけでなく、技術進歩を含まない恒常的成長過程をも考慮に入れるが、基本的なモデルを考えるさいには、生産要素の増大するケース、とくに蓄積の起こるケースを、経済発展の過程と部分的に重複するという理由で排除する。その意味で、彼が静態を語る場合、事実上定常状態を念頭においており、これは経済静態のモデルの純粹化ないし単純化である。第2に、彼はこのような経済静態のモデルによっては経済発展を含む現象を把握することはできないと考えるが、静態のモデルを否定したり排除するのではない。シュンペーターにおける静態と動態は、どちらが正しいとか、どちらが現実的であるかといったものではなく、分析方法と問題対象との間の特有の結びつきを意味しているのである。「動態がいくつかのものを破壊しなければならず、またいくつかのものを修正しなければならないことは理解される。しかし、それらは外堡、つまり増築されたものにすぎない。静態的理論の中核は、発展によって支配される理解によって取って代えられるべきものではない。」⁽¹⁵⁾

注 (15) Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1 Aufl., Duncker & Humblot, Leipzig, 1912, p. 511.
(佐瀬昌盛訳「国民経済の全体像」玉野井芳郎監修『シュンペーター・社会科学の過去と未来』ダイヤモンド社、昭和47年、364ページ。)

具体的にいえば、ここで4組の対比が考えられる。⁽¹⁶⁾第1は、静態理論と動態理論という2つの理論の用具の対比である。第2は、実体的な過程について、循環・均衡化・適応の過程と、循環の変更・不均衡化・革新の過程との対比である。第3は、経済生活の時期について、経済体系の整理と再編成が試みられる不況期と、既存の体系からの離脱が試みられる好況期との対比である。第4は、経済主体についての単なる業主と企業者との対比であり、もっと一般的にいえば普通の人間類型と指導者類型との対比であり、行動の動機に遡っていえば、快樂主義的な願望充足と、活動と創造と勝利の追求との対比である。第1の点における理論の相違は、第2、第3、第4の点における異なった事実を説明するものである。

なお厳密にいえば、シュンペーターはのちにフリッシュの静学(同時点理論)と動学(異時点間理論)の定義を受け入れ、この区別が静態(定常状態)と動態(非定常状態)との区別とは無関係であることに注意を喚起している。⁽¹⁷⁾この定義に従えば、シュンペーターの提起した理論は動学ではなく、発展理論と呼ぶべきものであり、彼が対象とする事態は単なる動態ではなく、定常状態および成長過程と対比される発展過程である。彼は定常状態および成長過程に対してはワルラス的な意味での静態的均衡理論が適用されるとみなし、この均衡理論に対して自分の発展理論を対置したのである。シュンペーター自身はむしろこのような対象と方法との間の対応関係を重視し固執していたのであって、経済領域以外にもこの対応関係がアナロジー的に妥当するとみた。したがってわれわれは以下において、フリッシュの定義を取り入れて窮屈な言葉の使い方をする必要はないと考える。

シュンペーターにおける静態的経済循環と動態的経済発展との区別は、彼の接近方法を二元論とみえず批判を生んだ。違う問題に対して違う方法があるということは、それ自身非難すべきことではない。批判の論点は、むしろ問題の次元においても方法の次元においても、静態と動態との交渉が明らかにされていないということであろう。⁽¹⁸⁾さらに、シュンペーターは歴史的・社会学的分析をも採用しているから、二元論どころではなく多元主義ないし総合主義であるという説もある。⁽¹⁹⁾これについても多様な方法の間の交渉こそが問題とされるべきであろう。われわれはこのような交渉の性質がシュンペーターにおける科学とイデオロギーとの接点をなしていると考え。経済静態と経済動態との交渉、および経済と社会との交渉をどのように考えるかは科学の構造を規定し、それによってとらえられる対象への見方を規定するものであって、このような科学や対象への見方を規定する要素は科学的認識に先立つイデオロギーにはかならない。われわれはまず、シュンペーターの経済学における静態と動態との交渉を取り上げ、両者の間の関係は二元論ではなく、静態一元論で

注(16) *Ibid.*, pp. 512-3. (邦訳, 365ページ。) Schumpeter, *Entwicklung*, 2 Aufl., 1926, pp. 120-2. (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』上, 岩波書店, 昭和52年, 213ページ。)

(17) Schumpeter, *History*, pp. 963-7. (邦訳 6, 2033-43ページ。)

(18) 中山伊知郎「解説」, 塩野谷・中山・東畑訳『経済発展の理論』(机上版), 岩波書店, 昭和55年, 502-4ページ。

(19) 大野忠男『シュンペーター体系研究』創文社, 昭和46年, 81ページ。

あることを4つの点から論証したいと思う。

(2) マグナ・カルタとしての均衡理論

第1に、シュンペーターが経済世界における均衡の証明は経済理論のマグナ・カルタであると述べていることの重要性に注目したい。新古典派経済理論においては、上述のような与件が一定に与えられると、経済体系に含まれるさまざまな生産物および生産要素の数量と価格、すなわち資源配分のパターンは相互依存関係をもちつつ一義的に決定される。ある種の社会生活の領域について、与件に対応して均衡状態を確定することができるとき、シュンペーターはその領域は論理的に自足的であり、その領域について自律的・独立的な科学を構想することができるのである。なぜなら、一義的な均衡を確定することができるとき、その領域は混沌ではなく秩序をもつということができからである。経済理論はまさに秩序をもった世界を主題とする。

ここで重要なことは、経済静態は均衡をもつけれども、経済動態は均衡をもたないというシュンペーターの考え方である。「われわれの思考の全体からは、動的均衡は存在しないという結論が導き出される。発展とは、その究極の本質からみて、現存する静態的均衡の攪乱であって、もとの均衡あるいは他のなんらかの均衡への復帰をめざすような傾向をまったくもっていない。発展は静態的経済の与件を変更する。……発展と均衡とは互いに排除しあう対立事象である。静態的経済が静態的均衡を、動態的経済が動態的均衡をそれぞれ特性とするというのではない。そうではなく、均衡はそもそも前者にしか存在しない。経済の均衡は本質的に静態的均衡である」(傍点引用者)。(20)

静態理論は現実の経済を十分に説明することはできない。それが扱うことのできるのは、上述のように定常状態と成長過程である。静態理論は与件を特定化することによって、第1に、外生的要因が与件の変更を通じて経済体系に及ぼす影響を明らかにすることができるし、第2に、内生的要因が与件を微少かつ連続的に変更する過程を取り扱うことができる。しかし、静態理論は、第3に、内生的要因が与件を非連続的かつ急激に変革する過程を扱うことはできない。「たとえば駅馬車から汽車への変化のように、純粹に経済的——『体系内部的』——なものでありながら、連続的には行われず、その枠や慣行の軌道そのものを変更し、『循環』からは理解できないような別の種類の⁽²¹⁾変動」を対象とするのが、シュンペーターの経済発展の理論である。

経済理論がこの第3のケースを取り上げるということは、静態的経済理論によって設定された経済の領域を補足し拡大することを意味する。革新はシュンペーターによって「経済的」、「体系内部的」なもののみなされているけれども、そのさいの経済の領域は静態理論が設定したままのものではない。その領域は基本的には企業者という別個の人間類型を含み、革新という行為を通じて波動

注(20) Schumpeter, *Entwicklung*, 1 Aufl., p. 489. (邦訳, 339-40ページ。)

(21) Schumpeter, *Entwicklung*, 2 Aufl., pp. 93-4. (邦訳上, 171ページ。)

的な経済発展現象を生み出すのである。ところが、上掲の引用文にみられるように、彼はこの経済動態の領域には均衡は存在しないとみる。革新は均衡の破壊でしかない。そうすると、彼の論理からいえば、経済動態の世界は単に経済に特有の独立性をもった現象を含むというだけでは十分ではなく、なんらかの均衡化ないし秩序化のメカニズムと結びつかない限り、学問の対象として成立しないことになる。そこで、彼は経済の領域を補足し拡大するけれども、経済動態の領域の中核としてあくまでも経済静態の領域があるとみなすのである。

結局、革新は与件変更の1ケースであって、それが経済に及ぼす影響は、革新に対する経済の適応、あるいは革新の経済への吸収という均衡化のメカニズムを通じて分析されるのである。問題対象として見るとき、経済静態と経済動態とは2つの別個の現象と考えられ、しかもそれぞれは与件のもとで成立する経済領域の独自の様相と、与件を変革する経済領域の独自の発展とを表わすことによつて、学問の対象としての経済領域の成立を可能にする。しかし、分析方法として見るとき、両者の分析を自律的学問として成立させるものは経済静態論にはかならない。経済動態論は静態論の助けを借りて初めて、経済発展現象に対応した新しい命題を付け加えることができるにすぎない。この意味で、静態的均衡分析は「自律的学問としての経済理論のマグナ・カルタである。」⁽²²⁾

シュンペーターの二元論は、静態と動態とが問題対象として必要不可欠の2つの現象であることに基づくといった解釈は、本質に迫るものではない。理論にとって何千という対象があろうと、そのことによつて理論が多元論になるわけではない。分析方法における統一性こそが問題である。シュンペーターは静学の方法と動学の方法との2つをもったのではなく、彼は均衡分析という静学の方法しかもたなかったのである。

このような均衡分析を初めて確立したのはレオン・ワルラスである。「ワルラスに対して、われわれは経済体系の概念と、われわれの科学の歴史において初めて経済諸量間の相互依存関係の純粋論理を有効に含む理論的用具とを負っている。」⁽²³⁾シュンペーターは終始ワルラスを最大の理論経済学者とみなした。

シュンペーター自身は、均衡分析が現実の経済の解明に当って不可欠である理由をもっと詳しく次のように要約している。⁽²⁴⁾(1)均衡理論はいかに抽象的であろうとも、経済論理の骨格を与えるものである。(2)均衡理論は、内生的変化によるにせよ外生的変化によるにせよ、与件の変化に対する経済体系の反応装置の記述を与える。(3)均衡状態の概念は、分析のためであれ診断のためであれ、参照の基準として不可欠である。(4)均衡概念の最も重要な用途は、均衡に向かう傾向が現実存在するというに依存している。(1)~(3)の論点は均衡理論の分析用具としての意義に関するものであ

注(22) Schumpeter, *Business Cycles*, Vol. 1, McGraw-Hill Book Co., New York, 1939, p. 41. (吉田昇三監修『景気循環論』I, 有斐閣, 昭和33年, 58ページ。)

(23) Schumpeter, *Entwicklung*, 2 Aufl. (邦訳上, 日本語版への序文, p. 4.)

(24) Schumpeter, *Business Cycles*, Vol. 1, pp. 68-70. (邦訳I, 98-101ページ。)

る。しかし、(4)の論点は現実世界における均衡化能力に関するものであって、前者とは一応別個のものである。

(3) イデオロギーとしてのワルラス

そこで、第2に、現実世界の問題に移ることにしよう。以上の分析方法に関する観念は、いま述べた(4)の論点を通じて、現実の問題対象についての見方の上に投影される。シュンペーターは、資本主義経済は内部に攪乱と変革の要因を含みながらも、好況と不況を繰り返すことによって、自動調節的、安定的性格をもつとみる。「われわれにとって重要なことは、まさに体系の中に均衡状態に向かう現実の傾向が存在するか、存在しないかということである。もし均衡状態という概念が景気循環分析の用具として有用であるとするなら、経済体系は攪乱されたときには、いつでも均衡を再び確立するように作用しなければならない。あるいは、……経済体系はあらゆる攪乱に反応して、変化を吸収するような仕方でも動く傾向をもたなければならない。……常識がわれわれに示すところによれば、均衡を確立したり再確立したりするこのメカニズムは、経済学の純粹論理の訓練として工夫された虚構ではなく、われわれを取り巻く現実の中に実際に作用している⁽²⁵⁾のである」(傍点引用者)。

単に観念の世界において静態的均衡分析の論理を展開することと違って、この静態論を現実には当てはめ、資本主義経済が均衡破壊的な革新の攪乱にもかかわらず、均衡化と安定化の傾向をもつと想定し、経済過程をそのように見ることは、以上で定義した意味において本質的にイデオロギーである。そしてシュンペーターはこのイデオロギーをレオン・ワルラスから学んだのである。これをシュンペーターにおけるワルラスのイデオロギー *W* と呼ぼう。

資本主義の発展過程が定常過程および成長過程と異なるのは、景気循環をとまらうという点にある。シュンペーターは景気循環を「均衡の近傍」をめぐる波動としてとらえ、好況・後退・不況・回復という4段階を区別した。後退や不況は発展の成果を刈り入れるための一時的な局面にはかならないとみなされたのである。

(4) 防備帯としての革新理論

第3に、このように見てくると、シュンペーターが革新の強調によって、均衡破壊や不均衡動学に重点をおいたという通常理解は文字通りに受け取ることができない。シュンペーターについての一般的な理解の仕方は、彼が従来の静態的均衡理論を単純に拒否するか、あるいはその限界を指摘して、均衡破壊の動態現象を解明するために発展理論を確立したというものであった。このような見方の根拠はきわめて単純素朴であって、人々は、資本主義はたえざる変化の過程であるという

注(25) *Ibid.*, Vol. 1, p. 47. (邦訳 I, 66-7ページ。)

シュンペーターの強調によって欺かれているのである。そして彼が定常状態の分析を経済発展理論の中に持ち込んでいるのは、動態的变化の過程をきわ立たせるためであるとか、あるいは動態的变化がなかったなら資本主義はどんな姿になるかを知るための知的実験の類いであるとみなすのが普通である。⁽²⁶⁾なかにはストルパーのように、シュンペーターがワルラスの影響によって、均衡に向かう経済の現実の適応力をきわめて強靱なもののみなしていたことを正当に評価する学者もいるが、しかしストルパーは、革新はそのように強力な均衡化能力をさえ破壊するものであるから、なみた⁽²⁷⁾いての努力ではないのだといい、革新の破壊力を強調する方向に向かってしまっている。

以上のわれわれの議論から、このような一般の見方がシュンペーターの理解として適切でないことは明白であろう。シュンペーターにおいては、均衡と不均衡とはともに経験的事実であって、景気循環の中に位置づけられており、爆発的な好況が無限に続くこともなく、また恐慌や不況が無限に続くこともなく、経済は循環を繰り返すことによって活力に富む安定性を備えているとみなされる。そして、このような経済的安定性を保証するものは、ワルラス的な市場の均衡調整能力であると想定されている。

そして、逆説的に聞えるかもしれないが、シュンペーターは資本主義経済の高度の内在的安定性に根本的な確信を抱くことができたために、かえって無軌道とも見える均衡破壊の動態現象を論理の中に収めることができたのである。どんなに均衡を破壊する力が現われようとも、市場はこれに対して受動的に適応し、影響を吸収してしまうのである。これが彼の経済秩序のとらえ方であり、このことによって経済学の存立が保証されたのである。

しかも、彼の考えによれば、革新は個性的・部分的・非秩序的であり、またそれによって作り出される経済発展は有機的統一体ではない。そのため革新の理論化を簡単に行うことはできない。彼にとって確信することのできる経済分析の論理は、ワルラス的な一般均衡理論であって、この観点からの革新の理論化は次の2つの仕方で、制約を受けている。

1つは、彼は革新という発展の要因に注目したにもかかわらず、実際に理論化しようとしているものは革新の随伴現象にほかならないという点である。彼は『経済発展の理論』への批判として、彼が企業者という1つの要因以外のあらゆる歴史的変動要因を無視しているという批難を受けた。それに対して彼は次のように答えた。「私の叙述はそもそも変動の要因を問題としたのではなくて、これらの要因がいかんして実現するか、すなわち変動の機構を取り扱ったのである。私の示した『企業者』というものですら、ここではけっして変動の要因ではなく、変動機構の担い手なのであ

注(26) こういふ議論は多いが、最近のものでは次を参照。J. E. Elliott, "Introduction to the Transaction Edition," Schumpeter, *The Theory of Economic Development*, translated by R. Opie, Transaction Books, New Brunswick, 1983, p. xix.

(27) W. Stolper, "Aspects of Schumpeter's Theory of Evolution," in H. Frisch (ed.), *Schumpeterian Economics*, Praeger, New York, 1981, pp. 30-1.

(28) する」(傍点シュンペーター)。彼が発展の動因とみなすものは、与件を変化させる外生的要因ではなく、与件を変化させる内生的要因としての革新である。しかし、彼はこの革新をいっそう分析しようとするのではなく、革新を出発点としたさいに生ずるさまざまな随伴現象を叙述しようとするのである。革新は企業者によって担われるという意味で内生的要因といってよいけれども、それ以上遡ることのできない究極的な要因であるという意味では外生的要因と変りはない。革新はいわば経済体系内部に生ずる外生的要因である。それが結果として景気循環を含む発展現象を引き起こすのである。

もう1つの制約と考えられるのは、シュンペーターは革新に限られた産業部門において群生的に発生するミクロ的過程であるとみなすために、マクロ的な集計量に基づく定式化を意味あるものと認めていないことである。「この関係〔貯蓄・投資・利率の間の関係〕は体系内のすべての変数⁽²⁹⁾の相互作用の正味の結果であるから、ワルラス的用具を用いて初めて表現できるのである。」「集計的均衡があたかも変化を引き起こす要因を表わすかのように、また全体としての経済体系内の攪乱がそれらの集計量からのみ生ずるかのように、集計的均衡に基づいて論ずることは誤りである。このような論法は景気循環の多くの誤った分析の根底にある。それは分析を事物の表面にとどめ、分析を真に重要な根底にある産業過程に入り込むことを妨げるのである。」⁽³⁰⁾彼が発展は有機的統一体ではないというのもこれと同じ意味であって、ケインズのマクロ分析に対する批判を意味している。かくして彼の経済発展理論はマクロ的定式化になじまない。数個の集計量間の関係によって経済を表現しようとするのは、彼によれば「戯画」以外のなにものでもないのである。

その結果、彼の発展理論を特徴づけている要素は、一方において、革新の担い手である企業者の動機、人間類型についての社会学的記述と、他方において、革新の衝撃によって生み出される景気循環のプロセスの印象的記述とである。とくに後者の記述は、定常過程とは異なる動態現象について理論を展開したものと受けとられているけれども、実のところは、革新—信用創造—強制貯蓄—企業者利潤—競争者参入—供給過剰—整理、といった程度の因果連鎖の指摘にとどまっている。経済発展過程についてのシュンペーターの本質的な見方を積極的に展開するためには、このような因果連鎖が景気循環を生み出す様相をマクロ的視点からではなく、産業構造の視点から分析する手続が必要であった。しかし彼はこれを明示的な形で提起することができなかった。

そして発展過程の実証分析である『景気循環論』は、クズネツツの評価が示しているように、まさに道具不足のために失敗に終わっている。⁽³¹⁾すなわち、企業者、革新、均衡といったシュンペーターの第1次的要因は、上に示したような因果連鎖にまでは拡張されるが、統計に表われる複雑な循環

注 (28) Schumpeter, *Entwicklung*, 2 Aufl., p. 93. (邦訳上, 170ページ。)

(29) Schumpeter, *Business Cycles*, Vol. 1, p. 78. (邦訳 I, 111ページ。)

(30) *Ibid.*, pp. 43-4. (邦訳 I, 61ページ。)

(31) S. Kuznets, "Schumpeter's Business Cycles," *American Economic Review*, June 1940.

変動を解明するためには、第1次的要因と循環変動との間のリンクとなる理論分析が不可欠であって、彼はこの必要なリンクを作り出すのに失敗したのである。このようなリンクを与えるべきものが産業構造、景気の転換点、3循環(コンドラチュフ、ジュグラー、キチンの波)図式などの間の関係についてのマイクロ理論的分析にはかならない。理論、統計、歴史といった経済分析の道具の中で、彼が重視する理論的分析がまさに不足しているのである。彼は理論分析の中では第1次的要因のみを強調することに終わっているが、これは資本主義の安定性への信念およびそれと結びついた分析方法の制約と関係があるように思われる。

第4に、以上の静態と動態との関係を方法論的観点から要約しておきたい。シュンペーターにとってワルラス的静態理論は、現実を秩序をもった機構とみる基本的なイデオロギー W であり、したがってラカトスのいう「中核」であるとみることが出来る。そしてシュンペーターの経済発展理論を W' と呼ぶならば、これは、上述のような制約をもつけれども、一般的な理論仮説としての静態理論を補足する補助仮説としての「防備帯」の提供を意図したものである。発展理論は静態理論を否定するどころか、これに依拠して成立し、イデオロギーとしての均衡世界観への批判や反駁を禁ずる機能を担っている。静態理論と動態理論とは、二種類の事実対象に応じて並存する道具ではなく、「中核」と「防備帯」という補完的な要素であり、消極的発見法と積極的発見法という異なる機能をもった要素である。これがいわゆる静態・動態二元論に対するわれわれの解釈である。しかし、シュンペーターにおいては、経済理論としての「防備帯」だけではなく、社会経済学的な「防備帯」が特殊な形でこれに付加されるのである。これが次の問題である。

4. 経済発展と社会的文化発展

(1) 経済発展理論の限界

シュンペーターは経済静態の論理を総括した『理論経済学の本質と主要内容』から出発して、『経済発展の理論』および『景気循環論』において経済動態の領域を開拓したが、この経済発展理論は、彼の社会科学研究的プログラムから見れば、中間地点に到達したにすぎなかった。『資本主義・社会主義・民主主義』は経済の領域のほかに広大な政治・社会・文化などの領域を設定し、両領域の交渉によって資本主義体制の歴史の変革を論じたものである。この全体的視野こそが彼にとっていっそう満足のいく完全な経済発展理論を与えるものであった。この意味で、『経済発展の理論』および『景気循環論』における経済発展理論は、『本質』と『資本主義』との中間に位する **half-way house** とでも呼びうるものである。

このように考えるならば、以上で述べたシュンペーターのイデオロギーは、いっそう拡大された歴史的・社会的視野の中で「中核」としての意義が改めて解釈されなければならない。シュンペー

ターのワルラス的イデオロギーが真価を発揮するのは単に景気循環の解釈においてではなく、むしろこの拡大された全体的視野のもとにおいてである。そして経済の領域と他の領域との交渉をどのようにとらえるかは、上述の経済の静態と動態との交渉の場合と同じように、再びイデオロギーによって支配されている。以下ではこのことを明らかにしよう。

社会生活全般にわたる全体的視野は、すでにシュンペーターが『経済発展の理論』の第1版を書いたとき、その第7章(第2版以後では削除)において示されている。そこでは「社会的文化発展」(die soziale Kulturentwicklung)という概念が「経済発展」に対置されている。しかし、その当時、経済発展といえば、このような包括的な視野をもった経済の歴史的過程を意味することが多かった。それに対して、シュンペーターはまったく逆に、抽象的な静態的均衡理論から出発して、その「防備帯」としての経済発展の理論を構築しようとした。彼の接近方法は当時学界において理解されなかったらしく、第2版はその点をいっそう明快にするように書き直された。第7章は社会生活の全体像を「社会的文化発展」として論じていたために、人々の関心がシュンペーターの経済理論的接近を無視して、旧来の包括的視野に向かいがちであった。そのため彼は第7章を削除したのである。彼自身は再びこの包括的な視野に復帰することを当然希望していながらも、『経済発展の理論』において静態との対比によって経済発展の画像を構成するさいには、包括的な視野の中で経済発展を考えることを一時的に断念したのである。

他方、彼は逆に、彼の発展理論が歴史的・社会的な変動要因を無視しているという批判も受けた。彼はそれに対して、上に引用した文章において、自分は変動の要因ではなく変動の機構を問題にしたのであると反論したのであった。すなわち、経済の領域の中で発展の議論をする場合には、辛うじて革新のみが究極的な要因として取り上げられるにすぎないからである。したがって彼はそのさい、経済組織や経済様式などの変動を説明する要因を論ずることも別個の問題であるとみなしたのであって、⁽³²⁾これらはやがて別のところで拡大された視野のもとで論ずべき問題と考えたのである。

このような両極端からの評価からも明らかなように、『経済発展の理論』における発展理論は中途半端なものであった。シュンペーターは企業者の革新を、経済の与件を内部から変革する要因と呼んでいるが、これはレトリックにすぎない。革新が事実上経済分析にとって外生的であるという点に、彼の経済発展理論の限界があった。

社会の全体的な視野のもとで初めて、資本主義的發展および変革の内生的説明が与えられる。シュンペーターは経済の領域に限定した場合には、資本主義を市場機構、私有財産制度、および信用創出機構といった経済制度のしくみとして定義するが、いっそう広範な視野をとるときには、それを政治制度や階級構造からものの考え方、価値体系、生活態度までを含む1つの文明としてとらえている。このように社会の諸領域の間には相互依存関係があって、いわば一般均衡が成立している

注(32) Schumpeter, *Entwicklung*, 2 Aufl., p. 93. (邦訳上, 170ページ。)

のである。経済の領域だけでとらえられた経済発展論は、資本主義の全体としての運動を示すには十分ではない。経済の領域だけでとらえられたシュンペーターの経済発展論は、マルクスの資本主義の分析にはとうてい及ぶものではない。それは資本主義の進化の方向を示すことができないからである。

資本主義の全体的な発展に迫るためには2つのことが必要である。1つは、経済発展が他の社会的領域に対して及ぼす影響をとらえること、いま1つは、他の社会的領域が革新の生起に対して及ぼす影響をとらえることである。上述のように、シュンペーターは経済体系の中に内生的発展要因としての革新を見出したが、それ自身がどのような環境によって支配されるかは解明されなかった。革新を説明する文脈は経済体系を包むもっと大きな領域を設定することによって初めて可能となる。シュンペーターは資本主義について語る時、多くの場合そのような文脈を用意していた。しかしその議論を包括的に展開したのは『資本主義・社会主義・民主主義』においてであった。

(2) イデオロギーとしてのマルクス

事実、シュンペーターは経済を超える大きな領域において、資本主義の全体的な変革の過程を取り上げた。そのさい、彼は資本主義の内生的発展と崩壊のイデオロギーをマルクスから学んだ。シュンペーターは経済発展理論の構築に当っては、マルクスの経済分析から何1つ受け取ってはいないが、資本主義の歴史的動態をとらえるさいには、包括的なものの見方をマルクスから受け継いでいる。それは「経済発展を経済体系そのものから生み出される独特の過程としてとらえるヴィジョン」⁽³³⁾であった。あるいは、それは「あらゆる瞬間に1つの状態が次にくる状態をそれ自身で決定するという事態を生み出しながら、自力で歴史的時間の中を進行する経済過程の理論という考え方」⁽³⁴⁾であった。

社会発展に関する唯物史観によれば、社会発展の原動力は生産力と生産関係との矛盾に求められる。シュンペーターはこの考え方を高く評価した。彼は唯物史観を次のような命題に要約している⁽³⁵⁾。(1)社会のあらゆる文化的表現は究極的には社会の階級構造の関数である。(2)社会の階級構造は究極的にかつ主として生産関係によって支配される。(3)生産過程は内生的進化を示す。マルクスにおいては、階級構造は生産関係の基軸をなすものであって、これは、一方で、経済過程の中で生産力との関係において蓄積と搾取の過程を規定すると同時に、他方で、上部構造としての社会的・政治的・文化的過程を規定する。この意味で階級関係は上部構造と下部構造とをつなぐ重要な環である。シュンペーターは、この唯物史観のフレームワークの中に、マルクスの社会階級論が別個のサブモ

注(33) *Ibid.* (邦訳上, 日本語版への序文, 5ページ。)

(34) Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, 2nd ed., Harper & Brothers, New York, 1947, p. 43. (中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』上, 東洋経済新報社, 昭和26年, 79ページ。)

(35) Schumpeter, *History*, p. 439. (邦訳3, 925ページ。)

デルとして組み込まれているとみなすが、資本・労働の二階級論，階級対立論，階級闘争論からなる社会階級論を価値の乏しいものと評価している。

上述の(1)(2)(3)の要約は、シュンペーターがマルクスの色彩を著しく弱める形でまとめたものである。まず(1)については、シュンペーターは、いわゆる上部構造が経済的土台したがってそれを支配する社会階級的要因によって一方的に規定されるという因果関係を否定し、単に関数関係があると表現するにとどめている。シュンペーターの場合には、上部構造が経済過程を支配するという逆の規定関係が重視される。(2)については、シュンペーターは階級構造は経済以外の多様な要因によって規定されるものであり、たとえば近代初期におけるブルジョワジーと封建貴族との両棲を資本主義体制の上部構造の特徴とみなしている。しかも彼は階級の内容が変わっていくという動的現象を重視した。最後に(3)については、マルクスの経済分析の構図は階級概念を基軸としており、それをめぐって資本蓄積過程と階級闘争過程とが表裏しつつ進行し、資本主義の体制的枠組みを破壊するというものであるが、シュンペーターはこのような具体的な分析装置と分析のシナリオの一切を否定し、資本主義経済過程の内在的進化と自己崩壊というきわめて一般の見方のみを取り出したのである。これをシュンペーターにおけるマルクスのイデオロギー M と呼ぼう。

このように、シュンペーターはマルクスの社会発展の分析を高く評価し、自分の考え方や目的がマルクスのそれとまったく同じであることを強調しているけれども、実のところ、彼がマルクスから受け継いだといえるのは、上述の経済史観のうちの(3)「生産の社会的過程は内在的進化（それ自身の経済的与件，したがって社会的与件を変革する傾向）を示す」というきわめて一般的な見方にすぎないのである。先に引用したように、彼は1つのマルクス論の結論において、「自力で歴史的時間の中を進行する経済過程の理論という考え方」をマルクスの真に偉大な業績と呼んだが、もう1つのマルクス論においても、やはり同じ論点を結論としている。すなわち、「経済過程の内在的变化——これはある仕方で蓄積を通じて作用しながら、ある仕方で競争的資本主義の経済と社会を破壊し、ある仕方で維持不可能な社会状態をつくり出し、これがある仕方で別のタイプの社会組織を生み出すのである——という壮大なヴィジョンは、いかに強力な批判にさらされたとしても、依然として残るものである。マルクスが経済分析家としての偉大さを要求しうるのは、この事実であり、またこの事実のみである。」⁽³⁶⁾ シュンペーターは資本主義的發展の総体的過程のイメージを、このようなマルクスのイデオロギー M をもとにして描こうとしたのである。このイデオロギー M から出発して、これと整合的なシュンペーターの社会発展の理論を M' と呼ぶならば、それはどのようなものであったであろうか。まず、マルクスとの相違点を明らかにしておこう。

シュンペーターは(3)についてのマルクスの一般的な見方のみを受け継いで、(1)と(2)を放棄したが、このことは、シュンペーターの総体的社会過程の分析においてマルクスとは異なった接近方法をも

注 (36) *Ibid.*, p. 441. (邦訳3, 931ページ。)

たらずはである。まず(1)に関していえば、マルクスは資本主義過程の分析に当って、結局のところ下部構造の内部において体制の変革を論ずることができたから、上部構造の問題は主要論題の単なる派生的な系論にすぎなかった。ところがシュンペーターの場合には、上部構造と下部構造との相互交渉を通じて体制の変革が論じられるのであって、マルクスの唯物史観のフレームワーク、すなわち上述の(1)(2)(3)に対応する枠組みが違った内容を含みながら、フルに利用されるのである。

また、(2)についていえば、シュンペーターにおいては、社会階級論はマルクスにおけるように上部構造と下部構造とを媒介する基軸的地位にはないように思われる⁽³⁷⁾。このことは、彼の社会階級論の具体的な内容から示唆される。彼の階級論について注目すべきことは、シュンペーターが階級現象を経済、政治、文化などの現象と同じように、独自性をもった1つの領域とみていることである。彼がある領域を1つの独自の領域として識別するという事は、そこに固有の人間集団が存在して、ある与件のもとでの均衡と、与件を変革する発展現象とが見出されるということであった。階級現象にはもちろん人間集団が対応しているが、経済、政治、文化などの領域においてそれぞれの活動を主とする人々と違って、階級現象に現われる人間はそれぞれ異なった活動分野に属するとみられた人間がいわば一場に会したものである。そういう人間を集めた場合に、階級構造がもつ社会的機能をシュンペーターは一般的な意味での「社会的指導力」と呼ぶ⁽³⁸⁾。異なった社会的領域には、それぞれ異なった種類の指導力が存在し、人々はその指導力に照らして位置づけられている。そういう異なった種類の指導力の系列が複合した結果がいわば集計としての社会階級である。そして新しい指導力の発揮、新しい指導者の出現が社会階級の交替をもたらす。階級現象の究極的な基礎は、個々の社会的領域において見られたように、個々人の適性の相違に求められる。指導者能力は稀少である。

諸領域の成果の複合が階級現象であるとするれば、マルクスのように社会階級を経済領域における機能的範疇、しかも労働と資本という2つの範疇のみから説明することは適切ではない。また資本家階級とか労働者階級というように階層を固定的に見ることも、階層間の流動性の現実と反している。マルクスの場合に社会階級の概念が基軸的な役割を演じたのは、第1に社会階級がもつばら生産関係によって規定されるという見方、および第2に上部構造が階級関係の表現であるという見方のためである。シュンペーターにおいては、いずれの見方も否定されるから、彼の社会階級論は経済分析と社会分析とを架橋したり媒介することはできない。むしろ階級現象はあらゆる社会生活の領域の結果を集計的に反映したものとなっている。これは、彼があらゆる社会生活の分野に静態と動態を見出し、革新と指導者という観念を共通に適用したことの最終的な総括であるといえよう。

注(37) 大野忠男氏は『経済発展の理論』と『社会階級論』とをシュンペーター体系における二大礎石とみなしている。上掲書、13、249ページ。

(38) Schumpeter, *Imperialism and Social Classes*, translated by H. Norden, Augustus M. Kelly, New York, 1951, p. 210. (都重人訳『帝国主義と社会階級』岩波書店、昭和31年、250ページ。)

(3) ワルラスとマルクスとの両立

シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』は経済の領域と非経済の領域との間の長期的な相互交渉を本格的に論じたものであって、資本主義はその成功のゆえに崩壊するという結論を導いた。その推論の仕方は、成功的な経済発展が非経済的領域に影響を及ぼし、これらの領域がさまざまな形で革新にとって不利な反作用を生み出すというものである。このような視野における社会発展の分析こそが、マルクスのイデオロギーを基礎にした理論 M' である。彼は非経済の領域が経済の領域に及ぼす反作用として次の点を分析した。(1)革新の日常化による企業者機能の喪失、(2)合理性の進展による資本主義の支持要因の消滅、(3)資本主義に対する批判的態度の増大、(4)政府介入による民間活力の減退、(5)資本主義的価値観の衰退。

このような分析の基礎にある考え方は、資本主義の市場機構は本来的・内生的に安定したものであるというワルラス的イデオロギー W と、資本主義は内生的発展を通じて自己崩壊を遂げるというマルクスのイデオロギー M とである。この一見して矛盾した2つのイデオロギーを両立させるものは、資本主義の経済的成功がかえってそれと不整合な非経済的要因を生み出し、これらの非経済的要因が資本主義の経済運営を困難にするという考え方である。経済は本来うまくいくはずであるのに、それを駄目にしてしまうのは経済の外部からくる影響のためであるというのである。しかし、そのような非経済的要因の作用は経済発展の結果であるということを考えると、ここに経済の領域と非経済の領域とを通ずる壮大な一般均衡を想定することができる。

先に、シュンペーターにおいてワルラス的イデオロギー W を「中核」とし、経済発展理論 W' を「防備帯」とする経済分析が構成されていると述べたが、ここでは上述のマルクスのイデオロギー M をもう1つの「中核」とした歴史的発展理論の「防備帯」 M' が形成されている。2組の理論をどのように考えるべきであろうか。

いま説明の便宜のために、革新を I 、経済領域の状態を E 、非経済領域の状態を N として単純に表現しよう。

$$E = F(I)$$

は『経済発展の理論』によって描かれた過程の全体を表わす。すなわち、革新 I の生起によって経済状態 E は景気循環を伴いつつある状態に収斂する。次に

$$I = G(N)$$

は、革新を規定するものとして一連の非経済的要因 N の作用を特定化したものである。革新を1つの制度的要因とみなすことができるなら、この式は定義上経済社会学に属するものである。ここで経済変動を説明する要因であった革新それ自身が、より広範な文脈の中では内生的に説明されることになる。また、経済を内から見た場合、経済世界は革新に対して適応し、経済を外から見た場合、革新は外部世界に対して適応するという意味で、経済は二重に受動的である。以上の2つの式をま

とめるなら、

$$E = F[G(N)] = H(N)$$

と書くことができる。経済の領域においては G 関数は知られておらず、革新は重要な制度的独立変数としての役割を演ずるが、拡大された視野のもとでは、結局革新は代入によって消去しうる要因であり、重要なものは F および G によって示される受動的適応のメカニズムだけである。

他方、経済発展の帰結は非経済的領域に影響を及ぼすであろう。これを

$$N = J(E)$$

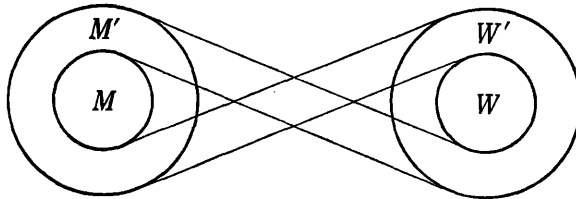
と書こう。マルクス流に言えば、これは上部構造の理論である。

変数 E および N を含む H 関数および J 関数は、経済の領域と非経済的領域とを覆う一般均衡を成立させる。もちろんシュンペーターはこれらの関数を詳細にかつ包括的に分析したわけではない。⁽³⁹⁾ 彼が取り上げた上述の(1)~(5)の要因は、考える相互関連を網羅したものではない。ここで注意すべきことは、これらの関数関係が歴史的な性質のものであって、可逆性を想定した理論的な性質のものではないということである。したがって彼が取り上げた要因は、逆の方向に作用する要因が実際に存在するにもかかわらず、歴史の本質的な動向を表わす支配的な要因であると考えられているのである。彼の資本主義の自己崩壊論によって描写された歴史的シナリオの本質は次のようなものであろう。資本主義の経済的メカニズムはそれ自体としては立派に作動する弾力的な装置であるが、それを動かすのは単なる抽象的な経済人ではなく、政治的・社会的・文化的関連の中におかれた人間である。そうした生活様式をもった人間が経済的豊かさの中で長期的に変容を遂げていくと、資本主義のメカニズムを動かすのに不適任となる。人間が社会の主人公である限り、社会は資本主義の経済的外被から脱却せざるをえない。このような統一的な全体像にまとめられたものこそ、シュンペーターが究極的に把握しようとした「社会的文化発展」であった。この全体像は人間のものの見方や価値観をも含めた包括的なものであるから、資本主義の衰退を望ましくないとか、嘆かわしいとする見方をともなわないのである。

ワルサ的イデオロギーを「中核」として展開された経済発展理論と、マルクスのイデオロギーを「中核」として展開された歴史的発展理論との接合は以上の数式によって表現されるが、方法論的には次の図のような特徴的な姿をとっていると想像される。ワルサ的イデオロギーを「中核」 W とし、その周囲に「防備帯」 W' が形成されているとしよう。このシュンペーターの経済発展理論体系は、彼の研究計画にとっては自己完結的ではなかった。そこで次に、マルクスのイデオロギーを「中核」 M とし、その周囲にシュンペーターの歴史的発展理論が「防備帯」 M' として形成されているとしよう。これらの2つの体系は大きな社会分析の体系として接合されている。その接合

注(39) 塩野谷祐一「資本主義文明の衰退と社会主義」『経済セミナー』別冊、『シュンペーター再発見・生誕100年記念』日本評論社、昭和58年。

の仕方は、2つの「防備帯」が別々に分離しているのではなく、次の図のように「中核」の回転運動を伝える「伝動ベルト」として相互に別の体系に乗り入れていると考えることができよう。その相互関係は、上で簡単に H 関数および J 関数によって示したものに相当する。



5. シュンペーターにおけるイデオロギーの性質

シュンペーターが最も高く評価した2人の経済学者はワルラスとマルクスであった。彼が自分の体系（前節の記号でいえば、 W' と M' ）を構築するさいに両者から受け継いだものは分析用具ではなく、資本主義経済の内在的安定性(W)と資本主義体制の内生的崩壊(M)という相互に矛盾するイデオロギーであった。

人々がシュンペーターの資本主義のヴィジョンについて語る時、それは W でも M でもなく、企業者の革新を指すのが普通である。たしかに革新は資本主義を特徴づける一見して明らかな現象であるが、これに注目すること自体はけっしてシュンペーターにユニークさを与えるものではない。ケインズは投資の変動を説明するに当って、シュンペーターが革新に注目していることを無条件に是認できるものとみなしている⁽⁴⁰⁾。ケインズが言外に意味したことは、そのようなことは当り前の事実にすぎないというものであろう。資本主義の動態を資本の限界効率の変動とみなすことだけでは、大した理論とはいえないからである。

むしろシュンペーターにとってユニークな体系を構成させた要因は2つである。1つは、「革新」という顕著な現象のもつ均衡破壊的、不安定化作用にもかかわらず、資本主義の経済体系は特筆すべき適応能力をもつという命題である。いま1つは、「革新」という顕著な現象のもたらす生産拡大上の成果にもかかわらず、資本主義の体制は無限に存続することはできず、衰退に向かわざるをえないという命題である。これらの2つの命題は、先にわれわれがワルラスとマルクスのイデオロギー W および M と呼んだものと基本的に異ならない。ただこの2つの命題のどちらにも、シュンペーターが劇的に強調した「革新」が明示的に含まれている。しかし、いずれの命題の場合にも、「革新」の作用にもかかわらず、結局別の力が過程を支配するというのが命題のいおうとすること

注(40) J. M. Keynes, *A Treatise on Money*, Vol. 2, 1930, *Collected Writings of JMK*, Vol. V, 1971, pp. 85-6. (長沢惟恭訳『貨幣論』II, 東洋経済新報社, 昭和55年, 95-6ページ。)

である。上述の数式による説明において、革新Iが結局において消去されるのも、これと同じことを意味するものであろう。

たしかに、シュンペーターは「革新」を強調した。しかし、その強調の華やかさは多分に「革新」の社会的叙述によるものであって、経済学的叙述は実は「革新」の随伴現象を経済の適応的反応メカニズムによって示したものにほかならないのである。たとえていえば、奇術師は手品を行うさい、トリックから人々の眼をそらせるために、他方で華かな道具と仕草によって人々の注意を集めておき、本質的な過程がそこにあるかのような錯覚を人々に与えるのである。シュンペーターの「革新」は人の眼を欺く派手な働きをしているけれども、われわれは彼がこっそりと導入しているイデオロギーの死活的な役割に注意を向けることを忘れてはならない。以下ではシュンペーターのイデオロギーの性質とその帰結について考察したいと思うが、彼のイデオロギーの観念論的性格および反政策論的性格という2点をとくに論ずることにしたい。どちらの論点もケインズとかかわりをもっている。

(1) 観念論的性質

シュンペーターが前科学的行為として資本主義経済のヴィジョンを描くさいに基礎としたものは、先駆者の観念であった。彼は経済過程についての先入観としてワルラスとマルクスの見方を受け入れ、それらと整合するように自分の理論を構築したのである。このような態度は科学についての彼の見方と深い関係をもっている。彼は科学の発展には表面的な断絶を超えて統一的な相貌が見出されることを強調し、さまざまな科学的努力は基本的な見方を求めて行われ、結局それを見出し、それに回帰するとみなしている。これが学説史を見るさいのフィリエーションという考え方である。彼は単に科学の対象だけでなく、科学の用具も所与の事実であると考えており、科学の用具は一度客観的な存在となり社会的環境の一部となると、無視されて終わることはないと考える。「事物の論理」は繰り返しみずからを表わさざるをえないのであって、思想の大きな流れはこのようなものとみなされるのである。⁽⁴¹⁾シュンペーターは偉大な思想の連続性への確信から、みずからワルラスとマルクスをイデオロギーとして継承することを企てたのである。

このような先入観の形成の仕方はケインズのそれと異なっている。ケインズはむしろ現実の経済の観察の中からヴィジョンを形成し、伝統的な思想からの離反を試みたのである。あるいは、彼は伝統的な観念と現実との乖離からヴィジョンを形成したといった方がよいかもしれない。ケインズは資本主義は放置するならば困難から脱却できず、凋落するであろうという見通しに立ったが、シュンペーターがいうように、これは資本主義の経済機構が内在的に欠陥をもつとみなす点でマルクスと共通し、シュンペーターとは異なったイデオロギーである。資本主義経済の内在的不安定性が

注(41) Schumpeter, *Vergangenheit*, pp. 99-103. (邦訳, 138-44ページ。)

ケインズのイデオロギーであった。当時、古典派経済学者は、シュンペーターのワルラス的イデオロギーと同じように、資本主義経済の内在的安定性という先入観をもって現実を見ていた。

シュンペーターはワルラスの均衡理論を現実の動態の世界に適用し、一見劇的な革新の世界を扱うかのように装いながら、実は経済がその攪乱を吸収するという調和観を現実に戻せしめた。これが彼のワルラス的イデオロギーであった。資本主義経済の内在的安定性 (W) への信念を基礎にしなが、資本主義体制の自己崩壊 (M) を主張するために、シュンペーターはマルクスのイデオロギー M を換骨脱胎し、資本主義は非経済的諸要因によって崩壊すると想定したのである。

シュンペーターのこのような資本主義崩壊論の発想は大不況などの観察事実に基づくものではなく、資本主義的発展の論理的帰結を追求したものであった。『資本主義・社会主義・民主主義』において展開された資本主義の崩壊と社会主義への移行の議論は、すでに『税税国家の危機』(1918年)や「今日における社会主義の可能性」(1920年)に萌芽が見出される。彼の資本主義崩壊論はなら危機意識や政策的関心をともなうものではなく、資本主義発展の極限に社会主義をおくという歴史学派的な発展段階説の思考に属している。

(2) 反政策論的性質

シュンペーターの学問の大きな特徴は政策論的観点を排除していることにある。次に、われわれはこのことの意味を彼のイデオロギーとの関連から明らかにしよう。彼がケインズと異なる重要な諸点はこの観点から説明することができる。両者は同じように不況や経済変動の研究に従事したが、基本的な観点を異にした。シュンペーターは科学としての経済理論と実践としての経済政策論議とを区別し、「いかなる科学も直接的な実践的目的を追求するという雰囲気の中では成長しない⁽⁴²⁾」と断言した。経済学が現実の政策問題に対して多様な対立的な答を出し、したがって経済学の信用が疑われるような危機的状況も、彼にとっては理論と実践とを混同した姿にはかならなかった。実践の立場においては、科学的命題以外の価値判断が取り入れられるし、科学的命題を道徳的に否定する価値判断すら取り入れられるからである。経済学は歴史的に実践的問題の論議から生れたが、経済学の進歩は政治や倫理からの脱却によって可能となった。シュンペーターはこのような科学観を広範囲に及ぶ学説史研究から確信していた。

1936年に『一般理論』が出版されたとき、シュンペーターはケインズの理論的問題点を正確に理解していたとは思われないが、ケインズ理論の政策論的志向をかき分ける敏感な嗅覚をもっていた。シュンペーターは『一般理論』の書評の中で、ケインズの試みは、限られた歴史的状況下のさし迫った現実問題にとってしか意味のない政策論を、一般的な科学的真理を装って提出しているとみなし、それは「政治的傾向に応じて経済学者を分裂させ、一時的には世間の人気を博するが、やがて

注 (42) Schumpeter, "The Common Sense of Econometrics," *Econometrica*, January 1933, p. 6.

反動を生み、そのどちらも科学とはなんのかわりもない」と述べた。⁽⁴³⁾この評価はかつてのケインズ経済学の勝利や、今日のケインズ派と反ケインズ派との論争の性質を洞察しているといつてよい。

しかし、シュンペーターが政策論に関心がなかったということは誤りである。彼は『景気循環論』の序文において次のように述べているが、それは彼の立場を最もよく示している。「私はなんの政策も勧告しないし、なんの計画も提案しない。政策や計画以外のことに関心をもたない読者は本書を読むことをやめるべきである。しかし、このことから、私が科学の社会的義務に無関心であると批判されたり、本書が時代の焦眉の問題と無関係であるとみなされたりすることを認めるわけにはいかない。今日最も必要とされ、最も欠如しているものは、人々が熱心に統御しようと決意している過程を理解することである。このような理解を与えることが、その決意に用具を与えることであり、その決意を合理化することである。これが科学の研究者が科学の研究者としてなす資格のある唯一の仕事である。⁽⁴⁴⁾」

彼は事態の本質的な理解のないまま性急な政策論議にふけることを戒めたのであって、科学を診断や勧告に適用することをいささかも否定していない。むしろ彼は「私が言う科学とは、価値判断や選択と結びついて、個別的あるいは体系的な勧告を生み出す技術のことである」と⁽⁴⁵⁾とさえ述べている。彼は、科学というものは自然科学にみられるように、人々がどのような目的をとるにせよ適用することのできる、また適用されざるをえない中立的な技術であるべきだと考えていた。しかし、われわれが論じてきたように、科学はその認識に先立ってイデオロギーから影響を受けている。イデオロギーは科学が構成されたあとで、科学を適用するさいに初めて現われるのではなく、すでに科学を構成する前に、科学を構成するさいに現われている。ケインズの例に見られるように、政策的実践の問題意識はヴィジョンの段階を通じて理論の形成の仕方に対して本質的な影響を及ぼしている。しかし、シュンペーター自身が確信し期待しているように、科学の段階では事実観察と論理分析のテストによってイデオロギーはイデオロギーとしては消滅するはずである。したがって、このようなケインズ理論に対するシュンペーターの批判の仕方を知ることはきわめて興味深い。

シュンペーターはケインズ理論の方法について次に述べるような2つの重要な批判を行っているが、以下で明らかにするように、それは彼自身のイデオロギーから発している。

第1はケインズの集計分析に対する批判である。シュンペーターの先入観からすれば、経済体系はあらゆる要素の一般的相互依存関係を通じてのみとらえることができる。彼によれば、ケインズの方法は、政策的実践の観点が直接に意義をもつ若干の変数のみを取り上げ、他の一切を凍結するという仕方ですべて単純化を行い、取り上げた変数間に簡単なマクロ的關係を設定し、結局において欲す

注 (43) Schumpeter, "Review of Keynes's General Theory," *Journal of American Statistical Association*, December 1936, pp. 791-2.

(44) Schumpeter, *Business Cycles*, Vol. I. p. vi. (邦訳 I, 2-3ページ。)

(45) Schumpeter, "Science and Ideology," p. 349.

る結論をトートロジーのように導くというものである。シュンペーターはこれを「リカードの悪弊⁽⁴⁶⁾」と名づけ、リカードとケインズとがこの方法においてまったく共通していると評している。

シュンペーターの解釈によると、ケインズのイデオロギーは、投資機会は消滅していくにもかかわらずブルジョワジーの貯蓄習慣は持続するために、資本主義は機能障害に陥るというものであった。この観念を理論的に展開するために、ケインズは消費関数、資本の限界効率関数および流動性選好関数の3つによって経済体系を構築した。シュンペーターは「このような僅かな材料からこのようなソースを作るとは、何と腕のいい料理人だろうか！」と感嘆の句を吐いている。しかし、これは皮肉にすぎない。マクロ分析に対する彼の懐疑は一貫しており、マクロ分析の基本である貯蓄・投資関係についても、「貯蓄・投資機構そのものは、恐慌または不況を説明する役割をもつ資格のあるものをなにも生み出すものではない」と述べている。⁽⁴⁸⁾

たしかに、ヴィジョンの段階におけるあるイデオロギーに対して適的な形で構成された理論は、はめ絵パズルの中にはめ込まれた個々の断片と同じように、最初の問題意識との関係を断ち切ることはできない。ケインズの集計分析はそのような性質のものである。しかし、ケインズがシュンペーターのイデオロギーから出発しないからといって、科学的手続に従って構成されたケインズの理論までが錯誤や虚偽を含むことにはならない。

第2はケインズの短期分析に対する批判である。ケインズは若干のマクロ的変数を残して、他の要因を所与として凍結するが、シュンペーターにとって許しがたいのは生産関数や資本設備を不変とみなす短期の想定である。ケインズの理論においては、「産業設備の創造と変化にともな^て起^るあらゆる現象、いかえれば資本主義的過程を支配する現象は、かくして考察から除外されることになる」⁽⁴⁹⁾ (傍点シュンペーター)。

シュンペーターの批判は、マクロ分析や短期分析がそれ自体として無意味だというのではない。もし要因 $A, B, C \dots$ が所与であるならば、 D は E に依存するという単純な関係を強調することができる。そのさい $A, B, C \dots$ が観察の対象以外のものであるなら、このような単純化に反対すべき理由はない。しかし、捨象された $A, B, C \dots$ が問題にとって不可欠の要因であるなら、単純化の試みはミスリーディングなものとなる。そして $A, B, C \dots$ が不可欠な要因であるか否かは、まさに問題設定を規定するイデオロギーによって指示されるのである。したがってシュンペーターといえども、「もしわれわれがケインズの正統派の立場に立ち、われわれの時代の経済過程に関する彼のヴィジョンを……受け入れるならば、彼の集計分析に反対する理由はありえない」⁽⁵⁰⁾ ことを認め

注 (46) Schumpeter, *History*, p. 473. (邦訳 3, 996 ページ。)

(47) Schumpeter, *Ten Great Economists: from Marx to Keynes*, Oxford University Press, New York, p. 281. (中山伊知郎・東畑精一監修『十大経済学者』日本評論新社, 昭和27年, 397 ページ。)

(48) Schumpeter, *Business Cycles*, Vol. 1, p. 78. (邦訳 1, 112 ページ。)

(49) Schumpeter, *Ten Great Economists*, p. 283. (邦訳, 401 ページ。)

(50) *Ibid.*, p. 282. (邦訳, 398-9 ページ。)

るのである。シュンペーターはそうしたヴィジョンや目的を与えられたものとする限り、ケインズの理論体系はきわめて適切な、巧妙に作られたものであることを承認する。シュンペーターが学説史上の人物としてケインズを称讃することができたのは、その限りにおいてである。

しかし、シュンペーター自身にとっては、好況と不況の波はあたかも心臓の鼓動や潮の干満のようなものであって、このような全体を動かしている資本主義の発展のメカニズムを知らずに一時的な不況や好況に動転するのはナンセンスであった。失業は繁栄に続く適応期間の一特徴にはかならず、本質的に一時的な現象であった。⁽⁵¹⁾ケインズはこの現象を過大視し、投資誘因の欠如を議論のかなめとしたが、彼の投資過程の説明はシュンペーターにとってはまったく非現実的と思われた。投資誘因の欠如が失業を生むというケインズの説明は、シュンペーターにとっては、「自動車がガス欠のために動かない」⁽⁵²⁾という説明と同じ程度の意味しかもたなかったのである。

シュンペーターが重視する長期的視点は、資本主義経済は内在的に安定的であるという彼のイデオロギーの系論にはかならない。しかし、理論の正当化に当って、1世紀ですら短期であるという彼の視野のもとでは、歴史的理論の検証や反証は容易ではなく、そのために長期の分析に関しては、理論の基礎にあるイデオロギーがイデオロギーとして消滅することを必ずしも期待することはできない。

したがって、シュンペーターが科学の名においてケインズの政策的志向を批判し、それと結びついたケインズの集計的および短期的分析を批判したさい、彼自身が自分の理論の基礎にあるイデオロギーの偏向から自由であったとは思われないのである。

さて、幸か不幸か、ケインズの理論は一世を風靡した。彼の理論によって基礎づけられた総需要管理政策は、自動調整機能を失ったと考えられた資本主義経済の再生のために珍重された。それにもかかわらず、シュンペーターの最後の痛烈な一打は次のようなものであった。ケインズのイデオロギーは、ブルジョワジーの生活様式としての貯蓄、およびそれと結びついた分配の不平等を有徳とみる社会的通念を打破した。シュンペーターによれば、これがケインズ革命の精髓であったが、このようなブルジョワ的価値図式への忠誠の放棄こそが、資本主義の崩壊を招く非経済的要因にはかならなかったのである。かくして、ケインズ理論の成功は資本主義の崩壊を招くものであった。

このように、拡大された視野におけるシュンペーターの分析は、歴史的視野のもとで政策や理想をも内生化した包括的なものであるために、政策や実践の勧告を導きえない構造となっている。政策や行動の変数を分析モデルに対して外生化して示すのが政策論や実践論の手法である。ケインズの貨幣しかり、マルクスの革命しかりである。ところがシュンペーターの包括的なモデルにおいては、社会はそれ自身のモメンタムによって動く。彼の学問は「事物の論理」を洞察する広範な図式

注(51) Schumpeter, *Capitalism*, p. 70. (邦訳上, 124ページ。)

(52) Schumpeter, "Review of Keynes's General Theory," p. 794.

を志向したものであって、拡大された意味においてワルラス的均衡分析といえるのではないか。経済静態と経済動態との交渉においても、また経済発展と歴史的発展との交渉においても、本質的に静態の適応の論理が貫徹するからである。これが彼の場合における「理論化された歴史」(histoire raisonnée) のとらえ方であった。シュンペーターが試みた1つの大きな社会科学研究は、経済と文明(社会制度、生活様式、価値観)との間の整合ないし対立の関係を問うという形で社会分析の方法を提起したものである。彼のイデオロギー W および M の具体的内容に賛成すると否とにかかわらず、われわれは、彼のイデオロギーが W' と M' との接合という型の社会分析を生み出したことに注目しなければならない。その接合の接点に「革新」があることはたしかである。「革新」は彼の研究計画にとって不可欠な中心的な題材ではあったが、われわれはいつまでもそれに目を奪われていてはならない。シュンペーター研究は印象主義的な、したがって断片的な受けとめ方を克服して、彼の研究計画を実質的に構成している科学とイデオロギーの構造を理解することに進まなければならない。

(一橋大学教授)